

大山寺阿弥陀堂 修理現場特別公開

大山寺阿弥陀堂は、天文21（1552）年に建立された、大山町でも古い建造物であり、明治37年2月18日に国の重要文化財に指定されています。平成7年の屋根葺替えから20年以上経過し、屋根等の経年劣化を踏まえ、現在修理事業に取り組んでいます。

9月9日・10日、普段見る機会のないこの修理現場を、事前申込みで特別公開しました。

修理工事は、こけら葺き屋根の全面葺替えや、回廊縁板など、傷んでいる木部の補修などを中心に行っています。屋根が二面葺かれており、屋根葺替えの際に前の板を剥いだ面、葺きかけの面、葺き終わった面



▲屋根の葺き替え見学

と修理の過程がよくわかる状態での公開となりました。現場で作業している大工さんから、実際に葺替え作業をしている様子を見ながら、詳しく解説をしていただきました。

また、受付テント付近では、屋根に葺く板材（こけら板・今回の材料は椶まわら）を手割りして薄い板にする実演や、竹くぎ打ち体験木工事の体験なども行われました。伝統的な建造物を修理するためには、いろいろな職人の技が必要であることを、見学者の皆さんも体験し、実感しておられました。

大山開山1300年を迎える来年度には、新たな装いとなった阿弥陀堂をご覧いただけます。



▲匠の技を体験

シリーズ「日本遺産」

第5話

前回に引き続き、第2章「信仰と結びついた全国唯一の牛馬市」について紹介します。

博労座の牛馬市への軌跡

大山の信仰の中心であった地蔵菩薩（大智明権現）は、牛馬の守り神としても信仰されました。

鎌倉時代以降、牛馬安全の加護を願う参詣者が引き連れた牛馬と大山の牧野で育った牛馬の交換や売買が徐々に盛んになり、やがて市へと発展していきました。当時の大山寺への参詣は徒歩ですので、遠方からの参詣者は、道中の荷物や食糧などを牛馬に背負わせて参らないといけません。そのため、自ずと交換や売買に発展していく素地はあったものと考えられます。

大山寺付近の広大な牧野周辺は、時期や場所の定めもなく、牛馬市が開かれていましたが、江戸時代中頃の享保11（1726）年から改革がはじまり、組織や制度が整えられたとされています。この大山博労座での牛馬市への改革・組織体制に尽力したのが、大山寺領内の日野郡大河

まちのたから (31) 文化財室通信

原村の寺侍、吉川右平太でした。開市当時、大山寺は大株主として経営に参加し、貸地料とともに収益の七分を取り、吉川右平太は世話人料として三分を取っていたと伝わります。吉川右平太の死後は、世話人を置かず、大山寺の直営となりました。

牛馬信仰で有名な大山寺が経営に大きく関わり、大山寺境内の「博労座」で行われたことは、信仰が育んだ全国唯一の「大山牛馬市」たる所以です。信仰に裏打ちされ、牛馬市は発展していきました。その一方、この牛馬市は、当時の大山寺における大切な収入源としての役割も果たしていたのです。



▲牛馬市の様子（昭和6年）

（人権・社会教育課 文化財室）